

「尾久初空襲(ドーリットル空襲)」---史実とそれを語り継ぐ教育運動

The First Attack by B-25

田村 正彦 (明治大学教育会)

はじめに

1941 年 (昭和 16 年) 12 月 8 日、日本が真珠湾を攻撃、その後破竹の快進撃でグアム、ウェーキ、香港、ボルネオ、マニラ、パレンバンを次々と占領、2 月 15 日シンガポール陥落、全国民は戦勝に酔いしれた。

12 月 12 日に東条英機内閣は閣議で「大東亜戦争」という呼称を決定する。時のアメリカ大統領ルーズベルトはすでに真珠湾攻撃の報復を考えその 1 か月後の 1 月 10 日、日本の都市への空爆研究を軍に命じていた。単なる報復にとどまらず米国民の戦意、士気の統一・高揚のためになることだと強調した。当時の飛行機の航続距離からすると、空母を日本にできるだけ接近させてから爆撃機を発進させる必要がある。新造空母ホーネットは全長 247m、幅 25.4m、速力 34 ノット。諸装備をした爆撃機の離陸滑走距離は 360m 必要とされるが空母の甲板は大型級でも 260m 程度である。ホーネットの場合はさらに少ない滑走で機を発進させなければならないという条件が付く。何種類かの機種が選定されたが航続距離、爆弾搭載力、翼の長さ等から陸上中型爆撃機ノース・アメリカン B25 が選ばれた。しかし爆撃後再び空母に帰還することは燃料、爆弾搭載量、さらに B25 の着艦速度があまりにも速く、また尾翼と着艦用フックの問題もあった。操縦士を中国に安全に着陸させるためできるだけ日本に接近してから爆撃機を発進させることに決定された。

日本への発進

2 月下旬フロリダの基地で 200 名の選ばれたパイロットの特別訓練が始まる。隊長ドーリットル中佐以外は誰もその目的地を知らず、上層部でもごく少数の将官しかこの作戦進行を知らない極秘のものであった。一ヶ月余り模擬弾と実弾を使用し、最短距離の発進、低空で標的接近、素早い爆撃と避難行動が繰り返し練習された。1942 年 (昭和 17 年) 4 月 2 日午前 10 時空母ホーネットを囲むよう重巡洋艦 3 隻、駆逐艦 4 隻、油槽船 1 隻の第 18 機動部隊がミッドウェーに向かう。空母エンタープライズを中心とする第 8 機動部隊が合流する。4 月 17 日には他を待機させ空母 2 隻巡洋艦 4 隻だけで速度を 20 ノット (時速 37 キロ) に上げ日本に向け航行。ホーネットには B25、16 機がひしめく様に積まれている。

各機の主な爆撃状況

先ずB25について説明しておく。全幅 20.6m、全長 15.7m、搭乗員 5 名、最高時速 498 ~520 k m、航続距離は偵察用 5178 k m、爆撃任務に就くときは 2778 k m、500 ポンド(225 k g)爆弾 3 発と焼夷弾。焼夷弾は 1 発につき約 2 k g のエレクトロン焼夷弾子 128 発が束ねられており空中で結束ベルトが外れて弾子が飛散する構造となっている。着弾すると直径 30 c mの炎が 60 秒間噴出する。

一番機(ドーリットル機長)

後樂園にある陸軍造兵廠東京工場をターゲットとしたが早稲田に焼夷弾 4 発投下。重軽傷者 19 名、全半焼家屋 42 棟、早稲田中学の生徒と通行人が直撃を受けて死亡。

二番機(フーバー機長)

途中で 1 番機を追い抜き赤羽の陸軍造兵廠兵器庫がターゲットであったが目標確認ができず目についた施設を爆撃した。

大日本帝国の首都への第一弾が荒川区尾久町に投下されたのであり「尾久初空襲」と言う。死者 10 名、重軽傷者 48 名、全半焼 38 棟と記録される。

三番機以降は割愛するが東京が中心であって 11 番機~16 番機は主として横浜、横須賀、名古屋、神戸への爆撃である。全域の直接被害は発表によって異なるが、爆弾・焼夷弾各 30 発、死者 87 名、重軽傷 450 名、物的被害約 400 戸となっている。

B25、16 機 80 人の隊員の爆撃後の脱出

本土空襲の一番機は午前 7:20、139mの滑走距離で飛び立ち 59 分間で全機無事故で発艦終了。空母部隊は反転速度 25 ノットで避退を開始。16 機はそこに戻ることなく爆撃後中国への脱出をはかる。片道切符、典型的な奇襲特別攻撃部隊であった。午後 8 時前後以降中国付近に至るも飛行場には着陸用非常灯も装備されておらず闇の中パラシュートによる脱出、不時着成功や失敗、日本軍の捕虜となったりと苦戦を強いられた。不時着時死亡 5 名、ソ連軍に抑留された者 5 名、日本軍の捕虜になった者 8 名。捕虜は軍律に照らし無差別攻撃の罪で 3 名銃殺、1 名獄中死亡。結局 80 名中 71 名が 6 月にワシントンに帰還、アメリカの英雄として称えられる。なおドーリットル隊長は少将に昇進、1993 年(平成 5 年)96 歳で他界。

尾久初空襲体験談

(1) 1942 年(昭和 17 年)4 月 18 日(土)快晴。当時私は尾久国民学校一年生、授業が午前中で終了し、五分ほどで自宅に着く。「只今」と奥の部屋の母に声をかけ玄関の板の間に上がり、習慣で柱時計を見ると 12 時 15 分。水を飲もうと台所の蛇口に手をかけた瞬間、大きな音と振動と共に家は数センチ持ち上がり分厚い床板と共に 3m位吹き飛ぶ。体調を崩して寝ていた母が寝巻きのまま飛んできて「空襲だ」と叫びながら転がり落ちていたアルミ鍋を私

の頭にとっさに被せる。間口の広い家は少しいびつになって大谷石の土台に収まり倒壊に至らず。間もなく帰宅した父はさすが船大工さんの建てた家は違うと自慢げに呟く。誰も体験したことがないのに空襲と直感したのはあまりにも大きな爆発音と家が持ち上がった異常さ、土埃、そしてすでに1940年（昭和15年）頃から町会ごとに在郷軍人、消防団員等の指導で実施していた「家庭防空防火訓練」による意識の高揚、心構えが出来ていたことによるものと思う。私の家から3mの区道を距てた北隣、機械屋の中山さんの家は直撃弾を受け一家6名爆死、3名が病院で死亡。家屋全壊全焼。昼食中のことである。当時の爆弾はまだ小さく225kg。図①の爆心地では直径10m、深さ5mのロート状の穴が出来る。1名死亡、上下水道破壊。図②地点では直径5m、深さ3m程度の穴である。

(2) 図③は64歳の煙草屋藤田さん宅。ここも直撃弾を受ける。その内容は尾久警察署吉田警部補の記録に生々しい。「そのままずると果てもない底もないところに落ちていく気がして人間が死ぬ時はこんなのかと、死ぬんだな—と思っている内に……自分で穴より出て立ち上がった所を救出される」。この話はその後多くの人の知る有名な話となる。

(3) 同じく③の爆心地にごく近い鳶の親方田中氏43歳は「あの時ちょうど昼食の最中で飛行機の大きな爆音に気がつきバカに低く飛んでいるなど言い終わるか終わらぬ内に……空襲だと直感しました。土煙りの家の中消防用の刺子と頭巾を身に着け近隣の救助に飛び出しました。焼夷弾は少しも恐ろしいものではありません。また発火した直後の状態はいつか警防団で実験したような物すごいものとは比較にならぬ程小さく線香花火と少しも変わりません。その辺の土の上にすり付け、砂でもかければ消えるのではないかと思いました。座敷でシュッシュと音を立てている線香花火のような焼夷弾を庭先に放り出し水をかけてすべて消火いたしました」

なおこの日警戒警報のサイレンは鳴らず空襲警報は爆撃後の12時28分ごろであった。吉田警部補が警察署便箋に聞き取り記録したものは、貴重な資料として高く評価され、引用されるものである。いろいろな経路でこの調書は流布されているようである。

(4) 地元の旧家鈴木氏は「被害の後は連日爆心地の見学として各地から旗を持ったりして多くの人が訪れてきたことを未だに覚えています」と私に語り、

(5) 当時の町会長のご子息は「爆弾跡を見に行くと云ったらそんなところへは絶対行くな」と強く叱られ

(6) 近隣国民学校の児童、五十嵐氏は「爆弾跡地へ列をなして見に行き壊れた家、大きな穴を見ても怖さはあまり感じなかったが、学校に戻ってから先生の怖い顔。見に行ったことは怒らない。しかし見てきたことは誰にも言うな。と血の気の引いた怖い顔、訳もわからず怖く今も忘れられぬ顔、その後学校はもちろん家でも話したことが無いだけに子ども心の怖さが残っている。夢にも出てこないとはどうしてなのか」と催して話してくださった。

尾久初空襲を地元では 60 年間忘れるように努めほとんど語ることはなかった

1941 年（昭和 16 年）12 月 20 日施行の「言論出版集会結社等臨時取締法」第 17 条、18 条に「僅かな被害を誇大に触れ回ったり虚構の放言を撒布したりすれば厳罰に処す。デマと知らず言い触らしても罪になる。真に祖国を思う者なら言って良いこと悪いこと位は分別がつくはずだ」と言う条文がある。

4 月 18 日の午後 1 時 57 分東部軍司令部は「午後零時 30 分頃敵機数方向より京浜地方に来襲せるも退散中。現在までに判明せる撃墜機数 9 機。皇室は御安泰にわたらせられる」と発表。各紙にも一面に大きく掲載されるが地名等随所に伏字が目立つ。「皇室ご安泰」の太文字に当時の国民等しく安堵の胸を撫で下ろす。当時の国民感情はそういうものであったろう。2 時間半後 9 機撃墜を取り消す。あの晴天で撃墜があれば充分目視できる。工業生産力や国民への影響きわめて軽微であるとしその動揺を防ぐための表現であろう。「敵の空襲はわが防空部隊の奮闘と国民の沈着機敏なる動作により被害を最小限に止め得たり」と発表する。4 月 18 日午後 5 時 50 分の大本営海軍部発表、翌 19 日 12 時の発表で被害数字がある程度具体的に判明してくる。軍部は撃墜の証拠として中国南昌に不時着した機の残骸の一部やパラシュートを急遽送付させ靖国神社に展示したり、その後の敗戦に至る長い間日本の軍部によってなされた「意図的報道」、そして現在でも政府の言うことを必ずしも全面的には信用しないとする風潮がすでにこの頃からも醸成されていたのか愛国者の一人としても残念である。真実を伝える、真実を知る権利、そして自己決定権、これは基本的人権の根本精神でありそこに人間の尊厳、自律の自由があるのである。

帝都が空爆された。しかも初弾がこの尾久の地に。自慢にならぬ事件、法律で、学校で、町内で禁じられているこの事を語るのを避け続ける。忘れようと努める。これが地元民の義務、節度と理解したのである。東京大空襲や疎開も含めて学友の安否も充分確認出来ず時間が過ぎてしまった。その後戦後の「民主教育」がスタートする。60 年間封印してきた事実は多くある。しかし忘れているのではない。いつか語るべき時に鮮明な多くの記憶が甦る。荒川区史上巻に「この東京初空襲の模様については尾久警察署に勤めていた吉田警部補の記録が同署に残されていた。それが「荒川史談会」会報に再録されているのでその一部を紹介する」と記録されているに止まる。前記のような歴史的背景もあったろう。行政による検証記録はこの尾久初空襲についてはほとんど空白である。尾久初空襲は単発で被害規模も少なくその後約 2 年間日本に空爆はなく人々から忘れ去られていく。小学生の学童疎開が一段落した 2 ヶ月後 1944 年（昭和 19 年）11 月 5 日東京上空に B 29 が初めて現れ、空爆は凄まじく激化していくのである。

「尾久初空襲を忘れないコンサート」と地域のかかわり

2000 年（平成 12 年）4 月 23 日（日）荒川国際平和展実行委員会（代表押田ツル様）が尾久橋熊野前陸橋下で尾久初空襲による戦没者の慰霊・献花を開催する。著名な郷土史家、野村圭

佑氏から尾久初空襲着弾地点が東尾久8丁目にあるはずだと聞きつけた荒川区議の瀬野喜代氏を中心となって爆心地探しを始める。地元出身の者では到底やらぬこと、出来ぬことで、その後も十年近くただただ慰霊・献花する姿勢に爆心地の尾久橋町会としてもいよいよこれに協力参加させていただく時が来たと判断する。着弾地3か所はすぐ判明する。尾久橋町会では地域力を発揮する。慰霊祭を発展拡大して「尾久初空襲を忘れないコンサート」を継続的に開催していくことを決定する。私の母校明治大学は、地域の活動を大切に積極的にこれに尽力する気風、伝統がある。この催しにも明治大学校友会荒川地域支部が組織を挙げて協賛してくれている。支部相談役の三嶋重信氏は荒川区副区長の要職に在り第1回目からよくこれを御理解下され、大きくまた具体的にバックアップして下さっておられる。荒川区民自慢の区長西川太一郎氏は最近23区特別区長会の会長にもご就任、さらに近く明治大学特別招聘教授にご就任、明治大学そして私どもとのご縁がさらに深くなることを心から喜ぶものである。行政との強い信頼関係により区の担当部署にも協力要請の助言をしていただいていることは主催者としてこれは大変に心強く有難いことである。

「尾久初空襲を忘れないコンサート」の推移を記す。

第1回 2009年（平成21年）4月26日（日） 株式会社ADEKA本社ビル16階

第2回 2010年（平成22年）4月18日（日） 首都大学東京荒川キャンパス講堂

第3回 2011年（平成23年）4月17日（日） 荒川区立尾久小学校体育館

それぞれ450～700名超の参加者があった。

第4回 2012年（平成24年）4月15日（日） サンパール荒川大ホール

尾久初空襲70周年記念の催しとなる。1000名収容の会場を埋め尽くすよう着々と準備が進められている。内容は第3回目より演出家村山岳男氏の指導も入り年々充実させて来ている。

第4回のプログラム概要を紹介させていただく。

主 催：尾久橋町会（会長 田村正彦） 荒川区東尾久8-8-6 尾久橋町会会館内

共 催：尾久初空襲を忘れないコンサート実行委員会 事務局長 大村みさ子

後 援：荒川区・荒川区教育委員会・財荒川区地域振興公社（ACC）

内 容：オープニングコンサート 荒川区立尾久八幡中学校吹奏楽部

式 典 実行委員長、荒川区長、荒川区教育長ご挨拶

第1部 対話劇 「尾久初空襲の史実」 初空襲体験者・東京都立竹台高校演劇部

尾久地区の児童による研究発表 荒川区立尾久小学校・荒川区立大門小学校

第2部 平和へのコンサート

吹奏楽演奏 東京都立竹台高校吹奏学部

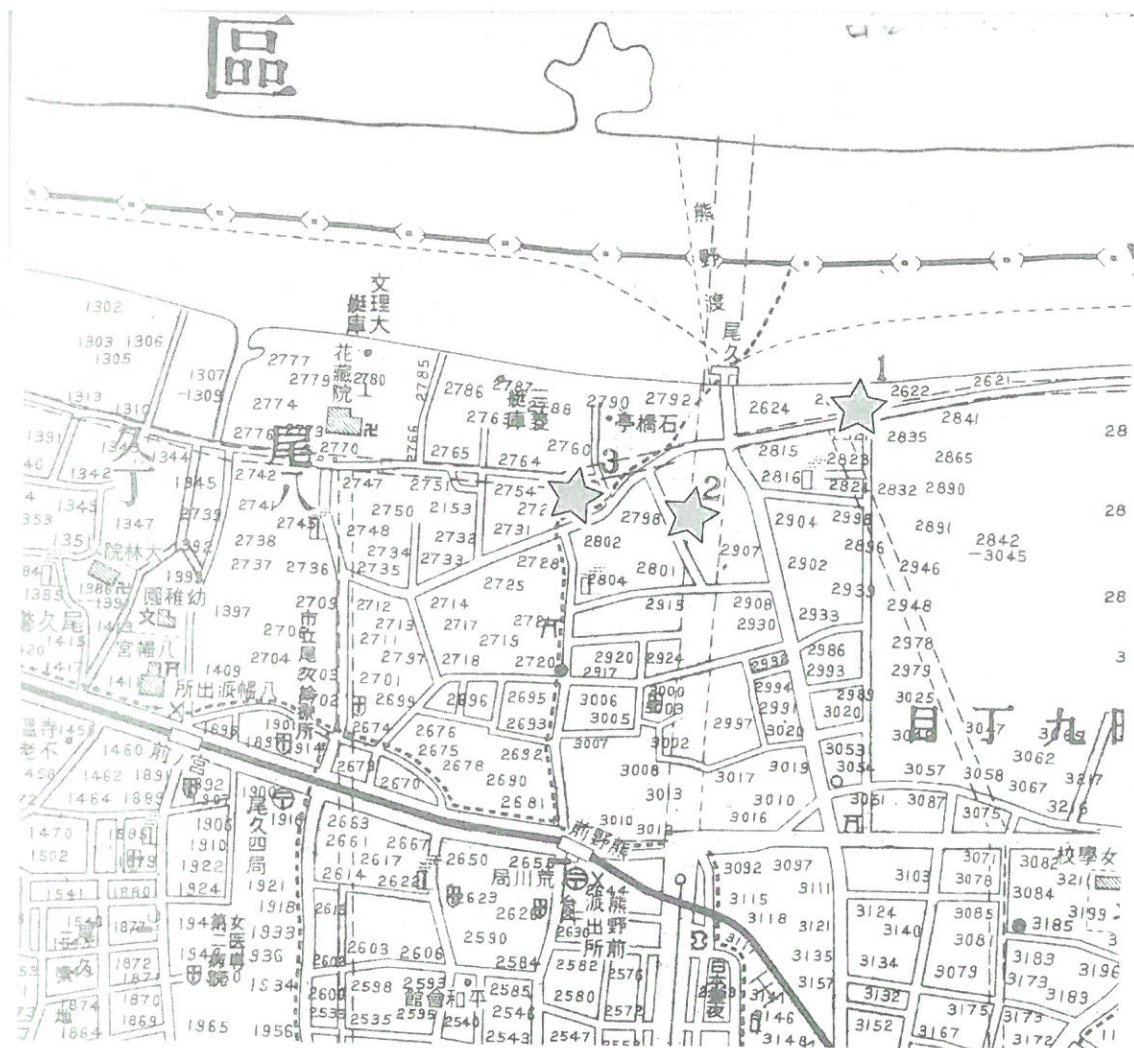
合唱 サニーコーラス他

入場無料 先着1000名

結び―尾久初空襲を子供たちに語り継ぐ

この催しに当初から地元尾久小学校、八幡中学校の歴代校長、副校長先生が非常な熱意をもって意欲的にご協力くださり多数の生徒を引率され、研究発表や器楽演奏をご指導下さっておられる。また区の教育長を始め教育委員会の諸先生方、P T A・町会・福祉関係諸団体の方々が力強くこの運動をバックアップして下さっている。

来年度の荒川区道徳教育郷土資料（小学校・中学校）に「尾久初空襲」の内容が掲載される運びとなった。今爆心地は当時の名残もなく立派な住宅、保育園が建っている。往時を語れる体験者もごく少数となってしまった。今こそ最後の生の声で語り伝えておきたい。そして爆心地にそれと判る碑を1本建てたい。私どもが未来を託す少年少女に日本史の中で、第2次世界大戦史の中で重要な位置を占める初空襲の史実を伝えたい。そして平和への願いを共有したいと心より思う。終わりにこの催しに関わっておられる多くの方々に深い感謝を捧げます。



昭和 16 年 4 月発行の「荒川区詳細図」（日本統制地図株式会社）に着弾地を示した。

(1) 当時の番地表示で荒川区尾久町 9-2623

(2) 同じく尾久町 9-2800

(3) 同じく尾久町 8-2759

なお (1) と (2) との距離は 200m、(2) と (3) の距離は 20m である。

主要参考資料

- | | | | |
|---------------|-----------------------|--------------|--------------|
| 柴田武彦・原勝洋 共著 | ドーリットル空襲秘話 | アリアドネ企画 | 2003. 11. 10 |
| 岡田舜平 | 二つの戦犯裁判 | 光人社 | 2009. 1. 7 |
| 原 康史 | 日本大戦争第 33 巻 | 東京スポーツ新聞 | 1991. 1. 22 |
| | 東京大空襲戦災誌第 2 巻 | | |
| 吉田警部補 | 東京初空襲の記録 | | |
| 荒川史談会 | 荒川史談No.282、283 | | |
| 東京大空襲戦災資料センター | 東京空襲一覧 | | |
| 足達左京 | 東京初空襲 | | |
| 荒川区 | 荒川区史 | | |
| 読売新聞 | 昭和 17 年 4 月 19 日/21 日 | | |
| 荒川区立尾久小学校 | わたしたちの尾久 | 開校 100 周年記念誌 | 1988・3 |
| 寺田信平 | 兵隊日記 | | 2007・3 |
| 小林次郎 | 少年の山河—ある疎開児の山村生活 | 驢馬出版 | 2002. 9. 15 |

その他

田村正彦が聞き取り調査をした尾久初空襲の体験者、情報提供者は 100 名を越す。